



題字 高校第十六回生の佐藤美佐子さん  
(旧姓田代)の筆になるものです。

### 「瀬木学園図書館の魅力」

森 千鶴 (大学 特任教授・図書館長)

今年度、愛知みずほ大学の特任教授としての着任と同時に、瀬木学園図書館長という大役を仰せつかることとなりました。どうぞよろしくお願いたします。

4月、瀬木学園図書館を初めて訪れた時、昭和の香り漂う外観や丁寧な並べられた多くの蔵書に優しく迎え入れられ、ホッと居心地のよい空間であると感じました。また、館内一面の書架には、一冊、一冊の本が大切に並べられ、出番を待っているかのようでした。閲覧室では、高校生、短大生、大学生が、それぞれ本を読んだり、レポートを仕上げていたり、書籍を検索したりする姿が見られ、瀬木学園図書館ならではの光景が印象的でした。

館長就任から半年が経ち、副館長の松澤先生、大学担当の武笠司書、短大担当の杉司書、高校担当の吉沢司書とのチームで図書館業務を進めていく中、瀬木学園図書館の魅力の数々を実感し、改めて大学生、大学院生、短大生、高校生のみなさんにお伝えしたいと思っております。

瀬木学園図書館は、昭和25年3月に開館し、大学・短大・高校の3校共用の学園全体の図書館としてスタートしたのは平成26年です。蔵書数は16万冊にのぼり、高校生の学習書を始め、学習マンガや文学・自然科学や社会科学などの入門書から専門書・学術雑誌に至るまで、様々な書籍や雑誌等を取り揃えています。また、近代文学の作家である夏目漱石の『こゝろ』や太宰治の『人間失格』などの手書きの原稿本(複製)や日本の医学の発展の基となった『ターヘルアナムトミア』の複製本などを始め、「貴重本」も多くなっています。大切に保管されています。このように、蔵書数、ジャンルの多さ、蔵書年代の幅の広さ、他の図書館には類をみないものがあり、大きな魅力となっています。また、平成25年には、1号館の4階に情報機器の設備が整った図書館分館が開館し、ノート

パソコンの貸し出しも行うなど、ラーニングコモンズ(学びのための共有空間)としての役割を果たしているのも大きな魅力の一つです。ハード面ばかりではなく、ソフト面においても、図書館職員が力を合わせ、図書館フェア、多読賞表彰、お薦め本の紹介、レファレンス(情報や資料の提示・提供)、季節感あふれる展示や掲示など、少しでも図書館に親しんでもらえるようなイベントやサービスを常に工夫していることも魅力と言えます。さらには、学内インテグレーションや学内ワークステーションを受け入れて、就労支援の拡充にも取り組んでいます。

こうした魅力の数々は、瀬木学園図書館の伝統であり、大切に受け継がれてきたものです。これまでの伝統を大切にしながらも、現代の情報化時代の中で、図書館の新しい魅力を作り出すことにも取り組んでいます。今や、小学校から大学まで、一人一台端末や電子黒板など、ICT(情報通信技術)の活用が進んでいます。本図書館においても、今年度中に電子書籍の導入を検討するなど、ICTの活用環境を整えて、「学びの情報センター」としての役割の充実という新たな魅力も加えた体制づくりを目指しています。

大学、短大、高校の学びを支える知識の中枢としての図書館の存在は大きく、今後も、魅力あふれる瀬木学園図書館として成長、発展していきたいと思っております。みなさんのご来館と、ますますのご利用を心よりお待ちしております。



### 図書館と私

廣井 いずみ (大学 特任教授)

まだ学校に上がる前、母は私に読み聞かせをしてくれた。母が好きだったのは、『ラプソディ』。母自身、読み聞かせをしながら楽しんでたと思う。塔の上から長い髪を垂らして王子様を迎え入れるところを聞きながら、私はラプソディになり、想像の世界を駆け巡った。

小学校の教室には、学級文庫があった。あるとき、担任の先生に「あなたなら、ここに本は皆読んだでしょうか」と声を掛けられた。おとなしい子どもだったので、本好きだと間違えられたのだろう。正直なところ、学級文庫があるのは知っていたが、どんな本があるのか、じっくり見たこともなかった。答えに窮したのを覚えている。家に帰れば、おとぎ話を読み、それ以上にジャンルを広げようとはしなかった。

中学生になり、まわりは部活に励む友達も多かったが、私はランニングのかけ声を聞きながら、世界児童文学全集を読んでいた。お菓子をポリポリかじりながら、お話の世界に浸るのは何とも幸せな気分であった。

高校に入り、やっと活動的になった私は、テニスクラブで放課後を過ごすようになった。疲れて、宿題をこなすのもやっとであった。しかしまわりには、読書好きが結構いた。毎朝満員電車で揺られながら新書を読んでいた同級生。「源氏物語」に入れ込んでいた女子学生。「〇〇様、ステキ」と目をキラキラさせながら同意を求められたが、教科書で読んだ以上の知識がない私は返事のしようもなかった。それぞれの世界を持つ読書に、いそいでいる級友達が輝いて見えた。

通っていた大学には、門から真っ正面に臨むところに、堂々とした立派な図書館があった。大学の中心に図書館があるというセッティングは、今の私には理想的に思える。しかし当時の私は、あいかわらずサークル活動に集中していた。図書館に行くことはなかったが、ゼミ発表の前には、心理学研究の図書室に出かけ、海外から届いた学術雑誌から発表のための論文を探した。四方を学術雑誌に囲まれた空間に、研究の世界に足を踏み入れたようでワクワクした。

大学時代に読んだ専門書と言えるものは、エリクソン・フロム『自由からの闘争』。格闘しながら読んだ。しかし、私の挑戦はそれで終わった。図書館には足を運ばず仕舞いだった。今思えば、もったいない話である。調べたり、本を通して考えることの重要

性を知ったのは、就職してからである。家庭裁判所調査官として、少年事件や家事事件にたずさわった。裁判所を訪れる人のお話をお聞きし、「事実は、小説より奇なり」と何回思ったことか。私のような経験の浅い者に、何が出来るだろうかと思ふことも多かった。研修所では、「人を理解しようとするなら、興味心を広げて本を読みなさい。」と言われた。まわりには、読書好きも多く、良い刺激をもらった。また当時、どの裁判所にも図書室があった。ケースに悩むと図書室に出かけ、本を手に取り、思いを巡らした。静かな空間で本を選ぶ作業は、心落ち着く時間であった。ケースに出会うことで、本を通して考え、学ぶことを知った。

大学に転職後は、私にとって図書館は、なくてはならない存在となった。以前勤めた大学では、「文献の取り寄せ数、トップですよ」と言われた。あいかわらず本学でも、大変お世話になっている。いくつかの大学図書館に出会う。規模も蔵書数も異なるが、どこも私の「知りたい」に応えてくれた。

今思うと、小さいときから本に親しんでいた割には、本を読んで自分の世界を広げようとするまでには、時間がかかった。そんな晩生の私だったから学生さんには伝えたい。図書館に行こう！ 図書館は、きっとあなたの「知りたい」を引き出してくれる。

## 図書館フェア2022



7月4日～8日に図書館フェアを開催しました。毎年恒例の、図書館で一番大きなイベントです。七夕飾り・新着本展示・テーマ展示・抽選会などを行いました。展示は、生徒や学生が願いを書いた短冊を貼りました。

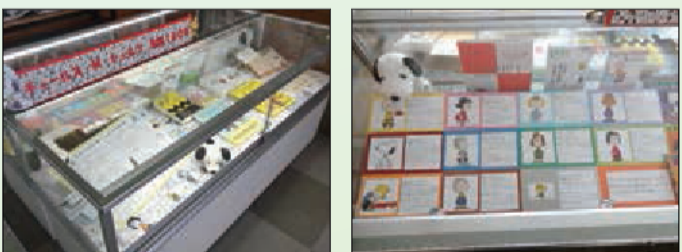
### 「テーマ展示①」天才ガウディとその作品

今年はスペインの建築家ガウディの生誕170年、サグラダ・ファミリア着工から140年の節目の年です。それにちなみ、ガウディとその建築物について展示しました。現在も建設中の教会サグラダ・ファミリアの詳細なども紹介しました。少しですがガウディ建築の魅力が伝わったかと思っております。



### 「テーマ展示②」チャールズ・M・シュルツ生誕100年

シュルツはアメリカの漫画家でスヌーピーの生みの親です。シュルツの生い立ちや漫画『ピーナッツ』に登場するキャラクターを紹介しました。また、歴代スヌーピーのぬいぐるみを置き、ショーケースをかわいく盛り上げました。馴染み深いキャラクターに生徒・学生も楽しそうに見てくれました。



### 「テーマ展示③」プラスチックと環境問題

4月に「プラスチック資源循環促進法」が施行されました。これを機会にプラスチックや環境問題を考えてもらおうと、法律の説明や環境問題の本を展示しました。閲覧室の展示のため、展示した本に触ることが出来ます。じっくりと本を読みながら、環境問題を考える生徒の姿がありました。

